



Title	Long-term outcome of angioplasty or stent placement for stenosis of the cavernous or petrous portion of the internal carotid artery( Review_審査要旨 )
Author(s)	伊藤, 公一
Citation	
Issue Date	2013-06-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/28996">http://hdl.handle.net/20.500.12000/28996</a>
Rights	

平成 25 年 4 月 15 日

(別紙様式第 7 号)

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	課程博 * 第 号 論文博	氏名	伊藤 公一
論文審査委員	審査日	平成 25 年 4 月 15 日	
	主査教授	澤口 昭一	印
	副査教授	久木田 二郎	印
	副査教授	國吉 幸男	印
( 論 文 題 目 )			
Long-term outcome of angioplasty or stent placement for stenosis of the cavernous or petrous portion of the internal carotid artery			
(内頸動脈の海綿静脈洞部または錐体部の狭窄に対する、血管形成術もしくはステント留置術の長期成績)			
(論文審査結果の要旨)			
上記論文に関して、研究に至る背景と目的、研究内容、研究成果の意義、学術水準につき慎重かつ公正に検討し、以下のような審査結果を得た。			
1. 研究の背景と目的			
頭蓋内動脈の動脈硬化性狭窄は脳梗塞の原因となる。抗血小板剤が有効であるが、無効例も存在する。1980年代よりこれらの病変に対して経皮的血管形成術や血管内ステント留置術を施行されるようになってきたが、内頸動脈はサイフォン部に大きな屈曲が存在し、デバイスがこの部分を超えることが困難であった。しかし内頸動脈の海綿静脈洞部と錐体部はこの屈曲の手前にあり、アクセスも容易である。しかしこの部分の効果と長期予後の詳細は明らかになっていない。今回申請者は、その安全性と再狭窄率、長期成績について <i>retrospective</i> に検討した。			
2. 研究内容			

対象は2000年4月から2009年3月までで、琉球大学 脳神経外科にて海綿静脈洞部と錐体部の狭窄に対して血管内治療を行った54例。男性43例、女性11例で、年齢は51歳から78歳（平均66.8歳）であった。海綿静脈洞部が13例、錐体部が41例であった。22例が症候性であった。全例局所麻酔下に大腿動脈より治療を行った。術中ヘパリンを使用。フォローアップは3～80か月で、平均29.9か月であった。54例中13例が経皮的血管形成術、41例が血管内ステント留置術を施行した。Permanent complication は2例、Transit complication は5例であった。周術期の morbidity rate は13%（7例/54例）であった。再狭窄は4例（12.96%）で認め、いずれも無症状であった。フォローアップ中5例の死亡を確認したが、いずれも治療と無関係と考えられた。

### 3. 研究成果と意義

本研究は頭蓋内動脈の狭窄病変に対する血管内治療が、特に外科的アプローチの難しい海綿静脈洞部と錐体部の治療に対して有効性を示した。頭蓋内動脈の血管内治療はまだまだ知見が乏しく、日々新たなデバイスや手技の革新によりその安全性、有効性が改善している分野である。本研究は、海綿静脈洞部と錐体部の血管内治療が脳梗塞の予防に十分寄与する可能性を示した点で、学術的意義は高いものと思われる。

以上により、本論文は学位授与に十分値すると判断した。

- 備考
- 1 用紙の規格は、A4とし縦にして左横書きとすること。
  - 2 要旨は800字～1200字以内にまとめること。
  - 3 \*印は記入しないこと。